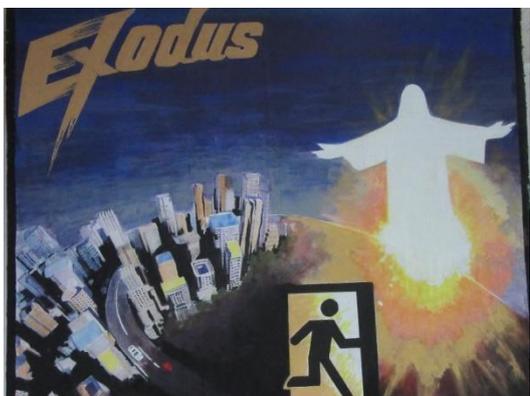


(そのとき、一人の律法学者が進み出て、イエスに尋ねた。)[「あらゆる掟のうちで、どれが第一でしょうか。」イエスはお答えになった。「第一の掟は、これである。『イスラエルよ、聞け、わたしたちの神である主は、唯一の主である。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』第二の掟は、これである。『隣人を自分のように愛しなさい。』この二つにまさる掟はほかにない。」律法学者はイエスに言った。「先生、おっしゃるとおりです。」

-マルコ12章-

## いのちに至る道

神は、人類の救いである「いのちに至る道」への案内者として、かつてモーセをたてました。民をエジプトの奴隷から解放して、三日で行ける約束の地を迂回させ、民に40年間、過酷な荒野を体験させたのは、不従順な民に、この「いのちに至る道」を習得させるためでした。約束の地を目の前にして、民にモーセが語った戒め“全身全霊をあげて唯一の神を愛しなさい”は、死を悟ったモーセの最後の遺言でした。被造物は「いのちに至る道」を持ち合わせてはいません。それゆえ私たちは神を知り、神が持つておられる「いのちに至る道」すなわち「唯一の神を愛して救い」に与るよう招かれているのです。



「神を愛する」とは「いのちに至る道」を生きることです。それは、被造物である私たちが、天地創造の唯一の神を主人公に、神に服して生きることです。間違っても、わき役である私たち中心に生きることではないのです。人間中心に生きていけば、中世以降、人類がひたすら求め続けた欲望によって今、人類は地球の崩壊を目の当たりにしつつあるのが現実です。人間中心に生きて、神から離れた人類の生きつくところは、神不在の闇、歯ざりししか聞こえない闇であると聖書は警告しているのです。

旧約のモーセに代わって人の子イエスは、祭司長、律法学者、長老たち、当時の宗教のリーダーたちから猛烈な反発を受ける中で、モーセの遺言を思い起こさせました。

人々はイエスの言葉じりをとらえて陥れようとしますがイエスの立派な答えに口を閉ざすしかありません。最後に一人の律法学者が尋ねました。「あらゆる掟の中でどれが第一でしょうか？」律法を完全に熟知している専門家でないとは答えられない質問に、イエスはモーセの遺言を繰り返して彼を従わせたのです。

「いのちに至る道」それは、大祭司であるイエスに従うことに他なりません。

旧約の祭司は、人々の救いを神に執り成すためにたてられた存在ですが、自分と民の罪のために毎日生贖を捧げる必要がありますが、イエスはただ一度の献身で、ご自分を通して神に近づく人々を完全に救うことがお出来になる真の大祭司なのです。人類の罪の許しのために十字架に登って生贖となられた、ただ一度の献身は、ミサごとに繰り返され、キリストをいただく私たちに救うのです。私たちは、この永遠の大祭司を戴いている以上の幸せは他にありません。ミサに与りご聖体を戴く毎に私たちは「救い」を得ているのです！これが他に代わる事が出来ないミサの有難さです。

2021年10月31日 主任司祭 昌川信雄